

# 「うたかたの恋」 皇太子ルドルフのサンゴ

オーストリアⅡハプスブルク帝国と海洋

松本 亜沙子

オーストリアⅡハプスブルク帝国は少なくとも一六世紀から二〇世紀初頭まで続いたオーストリアの帝国である。一三世紀にはハプスブルク家のルドルフ（一二一八―一二九二）が神聖ローマ帝国の皇帝に選出され、一五世紀以降は帝国とハプスブルク家はほぼ同義語となった（コーン一九六一）。オーストリアの首都ウィーンはドナウ川の片隅に立地し、同じドナウ川流域ではヨーロッパでもっとも古い先史時代の土偶（ヴィレンドルフのヴィーンス・約二四〇〇年から二二〇〇年前）を産出したことでも知られる旧石器時代からの要所であった。ドイツ、ハンガリー、チエコなどと接しているこの内陸国家オーストリアに海軍が存在し、また世界一周の海洋調査（Novara expedition 1857-1859）

を行ったというのは不思議に思えるかもしれない。しかし第二次世界大戦後にハリウッド映画により有名になった「サウンド・オブ・ミュージック」のトラップ大佐が海軍大佐の設定を踏襲しているように、オーストリアには海軍が存在していた。

一五世紀中ばから始まった大航海時代（英語名では大発見時代（Age of discovery）、ヨーロッパは、インド・アジア大陸・アメリカ大陸などへの様々な探検、貿易、領土獲得、植民地化などを行った。一七世紀中ごろまでに殆どの土地にヨーロッパ人が到達し大航海時代自体は終焉を迎えたが、それに引き続き今度はヨーロッパ・アメリカによる科学調査航海が行われる一八世紀から一九世紀の啓蒙時代（Age of Enlightenment）がやってきた。

一九世紀末、オーストリアは世界一周航海、紅海、北極航海などの大規模な海洋調査を行い、現在のウィーン自然史博物館はそれらの所蔵標本を保管するために建設されたといっても過言ではない。自然史博物館には世界有数の（世界一と言ってもいいかもしれない）紅海のサンゴ礁の骨格標本コレクション（一八九五―一八九八採集）が所蔵されており、それらは現在の世界状況からすると二度と採集することが不可能な貴重な標本類である。この海域のサンゴ礁の研究をしている研究者は世界でもごく少なく、膨大な標本の量に研究が追いつかないままである。

このウィーン自然史博物館に、日本産のサンゴも所蔵されている。

#### ＜ウィーン自然史博物館＞

ウィーン自然史博物館の所蔵品は、マリア・テレジア (Maria Theresia (1717-1780)) の夫の皇帝フランツ一世 (フランツ・シュテファン Franz I Stephan (1708-1765)) が、一七五〇年にフィレンツェのジャン・ドゥ・バイユウ (Chevalier Johann von Bailou (1684-1758)) から三万点に及ぶ宝石、鉱物等の資料を購入したことに始まる (Ott et. al. 2012)。一七六五年の皇帝フランツ一世の死後、マリア・テレジアはそのコレク

ションを国家のものとした。そしてそれを一週間に二度一般公開した (Ott et. al. 2012; Web Ref. 1 NHC)。これが、ウィーン帝国博物館 (Musei Caesarei Vindobonensis) である。ウィーンのラテン語名はウィンドボナ (Vindobona) である。この地名は同名のローマ帝国の宿营地ウィンドボナを起源としている。マリア・テレジアの孫が、オーストリアハプスブルグ帝国フランツ・ヨーゼフ皇帝の祖父にして最後の神聖ローマ皇帝・フランツ二世 (オーストリア皇帝フランツ一世 (1768-1835)) である。

博物学コレクションは一八世紀の間、ホーフブルク宮殿で、珍しい貝、サンゴ、化石、貝殻、宝石、鉱物などが知識を得るために、そして驚嘆するために公開されていた (Web Ref. 1 NHC)。

一八四八年に一八歳のフランツ・ヨーゼフ皇帝 (1830-1916) が即位した。一八五七年の年、彼はウィーンの市域拡大と改修美化に関する勅令を出した (加藤一九九五)。そして、ウィーンの高い城壁を撤去し、現在も残るリングシュトラッセ (環状道路) を一八五九年に建設を開始すると同時に、周囲の再開発を行った。一八六〇年代以降、国会議事堂、市庁舎、ブルク劇場、国立歌劇場が建設された。この環状道路は現在も市電が周回している (図1)。一九世紀も一八六〇年代以降がウィーンの産業膨張期にあたり、現在のウィーンの中央部の景観は殆どこの時期に形成さ



図1 ウィーン自然史博物館 (Naturhistorisches Museum Wien : NHMW) の屋上から、ウィーン市庁舎及びホーフブルク宮殿の庭。左端の人物像の列は自然史博物館と美術史博物館の屋上の各分野の偉人の像。

Photo : A. K. Matsumoto, 2012

れた。

自然史博物館と美術史博物館は、主にハプスブルクの増え続ける膨大なコレクションを収納するために、一八七二年から一八九一年の間のその環状道路の建設に伴って建設された。標本類はその前はホーフブルク宮殿内部に所蔵されていた (Web Ref. 2 NHMW-overview, 2011)。またコレクションの一部は、古い建物から移されたものもあった。例えば動物学キャビネットコレクションの入っていた Hofbibliothek などである (Web Ref. 3 NHMW-history, 2011)。

自然史博物館は一八五二—一八七六年の間に再編成され、一八八九年八月一〇日に正式にフランツ・ヨーゼフ一世により、美術史博物館 (Kunsthistorisches museum) と同時に、一般公開された。この二つの博物館は外観を同じくし、マリア・テレジア広場を挟んで向かい合っている (Web Ref. 4 NHMW-Mineral, 1997)。当初は大きな構想であったが、予算がかかりすぎるとのことです。自然史博物館と美術史博物館の対の博物館だけが建設された。

現在の建物は一八七二—一八九一年の間に建設されたもので (Web Ref. 4 NHMW-Mineral, 1997) 今も当時の姿のままである。屋上には各分野の偉人の像が並んでいる。美術館と自然史博

博物館とで共通している人物はただ一人、ギリシャのアリストテレス、建設が始まった時に存命だった人物は進化論で有名なイギリスの地質学者チャールズ・ダーウィンだけであったという (Perso. comm. Dr. Satman, 2012. Wien)。

〈ウィーン自然史博物館の日本のサンゴ〉

この自然史博物館にいくつかの日本産のサンゴ標本が所蔵されている (図2)。標本ラベル及び古いカタログ (台帳) には以下の通り記載されている。カタログというのは、博物館が現在の姿になる前の古い標本番号を記録した革装の本で、すべての所蔵標本のデータの詳細が当時の記録として書かれているものである。およそ一五〇年前前のノートになる。

ラベルとカタログの情報をあわせると、以下の通りである (図2)。

“Coll. Musei Vindobonensis  
Evertebr. varia Inv. No.8108  
Leptogorgia spec.  
Japan  
Kronprinz Rudolf 1076

Sr Rais Hopeit

dam Kronprinz Rudolf”

(ウィーン博物館コレクション)

無脊椎動物 varia (variation?)

無脊椎動物番号八一〇

八 (登録番号)

Leptogorgia spec. (サンゴ種名)

日本産

皇太子ルドルフ 旧登録番号一〇七六)

もう一つは、

“NHMW 8132

A. N. 1076

Gorgonia

Sr. Rais Hopeit dam kronprinz Rudolf”

(ウィーン自然史博物館八一三二 (登録番号)

旧登録番号一〇七六)

Gorgonia (サンゴ種名)

Sr. Rais Hopeit 皇太子ルドルフ)

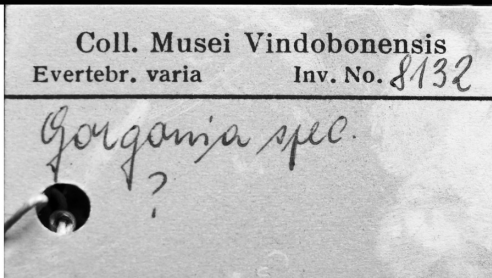
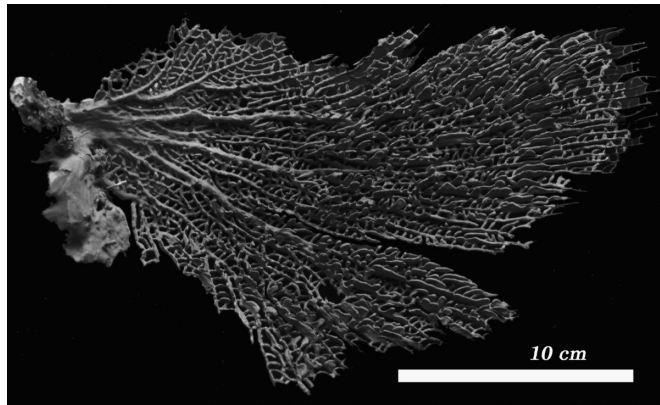
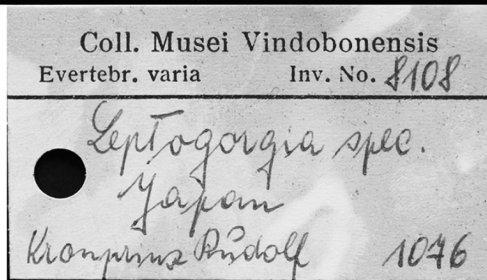
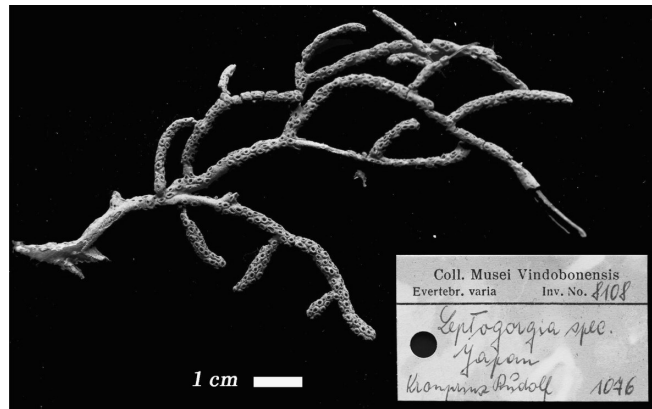


図2 ウィーン自然史博物館 (NHMW) 所蔵の日本産八放サンゴ標本とラベル。

(a) NHMW8108 (A. N. 1076), (b) NHMW8132 (A. N. 1076). Photo: A. K. Matsumoto 2012

これらの標本は二〇一二年の標本調査の際に筆者により発見された。この二つの標本データに記されている「Kronprinz Rudolf」とは、一八七五年当時のオーストリアの皇太子、かつ名前がルドルフといえ、一人。神聖ローマ帝国皇帝・ハプスブルク王朝最後の皇帝フランツ・ヨーゼフと皇妃エリザベートの息子、ハプスブルク帝国後継者でありながら自殺を遂げた皇太子ルドルフ（一八五八—一八八九）である。

フランスの作家クロード・アネ (Claude Anet) によって小説化され、海外ではマイヤーリンクの悲劇として何度も映画化され、日本でも宝塚歌劇で「うたかたの恋」として舞台化されるなど、世紀末ウィーン・ハプスブルクのフィクション・ロマンスとして、またハプスブルク帝国の皇太子が情死するというスキヤンダル性などで、現在においても非常に人気のある人物である。母のオーストリア皇后エリザベートもさすらいの皇妃として知られ、その生涯を何度も映画化や、ミュージカルになりウィーンおよび、日本でも根強い人気を誇っている。

しかし、このルドルフの自然科学分野への興味に関しては日本では殆ど知られていない。

#### 〈皇太子ルドルフ〉

皇太子ルドルフは一八五八年八月二日にハプスブルク帝国皇帝フランツ・ヨーゼフと皇妃エリザベートの長男として生まれた。生まれてすぐに皇帝フランツ・ヨーゼフにより帝国陸軍第一九連隊の大佐に任命された (マルクス一九九三; Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012)。軍隊や軍事には熱中しなかった。文芸の他に自然科学、わけても鳥類学と鉱物学に関心を寄せていた (マルクス一九九三; Web Ref. 6 CPR-museum notes, 2006)。

一八七〇年、一二歳の時に既に鳥類学への興味の現れとして鷹狩に関する一〇〇ページの最初の論文 (Adlerjagden [Eagle Hunts]) を発表し、生涯で四〇編の鳥類学の論文を書いている (Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012)。また彼の鉱物学への知識と興味は、一八七二年に自然科学の分野の個人教師であった地質学者のフェルディナンド・フォン・ホックステッター (Christian Gottlieb Ferdinand von Hochstetter) (1829-1884) によるところも大きく (Fleming, C. A. updated 1-Sep-2010)。彼はフランツ・ヨーゼフ一世統治下のオーストリア帝国で、一八五七年から一八五九年にかけて行われたフリゲート艦ノヴァラ号世界一周調査航海 (“Novara expedition”) に地質学者として指揮をとり乗船している人物 (後述) で、一八五六年にウィーン大学講師



図3 1874年、15歳の時の皇太子ルドルフの教師たち。

前列左から3人目が自然科学分野の教師であった地質学者フェルディナンド・フォン・ホックステッター（のちのウィーン自然史博物館 NHMW の初代館長（1876-1884）。その他後列左から、Lietenant-Colonel Anton Kraus（軍事科学）、宮廷司祭 Laurenz Mayer（宗教学）、Josef Krist（博物学）、Wagner 大佐（軍事科学）、Du Chêne（フランス語）、Greistorfer（ドイツ語）、前列左から、物理学者 Dr. Jungh、Heinrich von Zeisberg（歴史）、Ferdinand Hochstetter（博物学）、Josef Zhisman（歴史）。（Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012）

(Fleming, C. A. updated 1-Sep-2010) 一八六〇年にウィーン帝国一王立工科大学 (Imperial-Royal Polytechnic Institute in Vienna) (現ウィーン工科大学) の鉱物学及び地質学の教授となっており、丁度この間にルドルフの教師を務めたと考えられる。

彼は一八七六年から一八八四年に帝国自然史博物館 (現ウィーン自然史博物館) の初代館長になっており、自然史博物館建設計画に関して主要な責任を果たした人物である (図3)。よって、ルドルフ本人も自然史博物館との繋がりはずっと維持されていたのである (Web Ref. 1 NHO)。

一八七三年のウィーン万博の際、その講義の期間中にルドルフは、動物学者でありかつフリーメイソンであったアルフレート・ブレイム (Alfred Brehm) と出会った。ルドルフのもっとも熱心な科学的な書簡はブレイムとのものであり、ブレイムの方もその著書「ブレイムの動物生態論」のうちのふたつの巻をルドルフに捧げている (マルクス一九九三)。

一八七七年、ルドルフは学問を修了したことにより聖シユテファン教皇騎士団勲章を授与された。一八七八年

には、生物学者ブレームのハンガリー南部への調査に同行し、ブレーム著「動物の生態 (Alfred Brehm's Thierleben)」第二版のために、鳥類学の論文三篇を執筆している (マルクス一九九三: Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012)。この時の調査旅行についてのルドルフの初著書は「ドナウでの一五日間 (Fünfzehn Tage auf der Donau)」というタイトルで刊行された。ルドルフ二〇歳の時である。この著作により鳥類学者として評価され、帝国学術アカデミーの名誉会員に選出されている (マルクス一九九三)。

ルドルフは鳥類の自然条件下での自然な行動の観察と、狩猟の楽しみを結びつけていた。一八八〇年の著作「鳥類学的観察と狩猟小旅行 (Ornithologische Beobachtungen und Jagdreisen)」にもそれが現れている。狩猟によって得た鳥類標本はヨーロッパの猛禽類や猟鳥類の研究に使われた。一八七〇年代と一八八〇年代に、ハプスブルクでは毎年三〇〇〇匹の動物が狩られた。これらの鳥類標本は、ウィーンの帝国自然史博物館において作製され、ホーフブルクのルドルフの個室に設置した鳥類博物館に陳列された。この標本を元にした数多くの鳥類の素描も残している (Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012)。また、その他に鉱物と岩石形成にも興味を持ち鉱物コレクションも所持していた。これは前述の地質学者であった教師のホックステッターの影響が大きいだろう。

う。

一八七九年には、今度はスペインとポルトガルに鳥類学調査旅行に行き、一八八〇年にはハンガリーのブダペスト大学から名誉博士号を授与している (Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012)。

一八八一年、エジプト学者ハインリヒ・ブルクシュ (Heinrich Brugsch-Pascha) と共にエジプトとパレスチナへ三ヶ月の学術調査に出かけた。旅行は鳥類学及び狩猟の他に、考古学的調査と民族的調査も含んでいた。鳥類学及び民俗学的観察を含んだ旅行記は「オリエント旅行 (Eine Orientreise)」として出版され、皇太子ルドルフの出版物のなかで最も広く知られた本となった (Kronprinz Rudolf 1881 in 2005; Web Ref. 5 CPR-TOL, 2012)。翌年一八八二年には、ドイツ鳥類保護協会 (German association for the protection of Birds) から名誉修士号が授与された。

一八八四年ルドルフは第一回ウィーン鳥類学会の後援をした。この時の鳥類学会の記念の銅メダルが残っている。このメダルは皇太子ルドルフが単独で刻印されている珍しいものである (図4)。ウィーン鳥類学会は一八七六年に設立されたものでルドルフはその年に協会の後援者となった。この学会の論文雑誌に、ルドルフは一八篇の論文を寄稿している (Web Ref. 5 CPR-TOL,





図4 皇太子ルドルフ  
第一回ウィーン鳥類学会記念メダル 1884年。

発行場所 Haus Habsburg/O: sterreich, 発行年代 Franz Joseph I. 1848-1916 Bronze-Medaille 1884 (o. Sign., v. K. Radnitzky) auf die 3. Allgemeine Ausstellung des ornithologischen Vereins in Wien, unter dem Protektorat von Kronprinz Rudolf (Brustbild nach rechts/Eine nach links fliegende Taube u:ber zwei Zweigen). Wurzb. 8041, Hauser 2857, 37, 7mm, 31, Ogr., Photo: A. K. Matsumoto

2012)。地理学に関する論文でウィーン大学から名誉学位を授けられており（江村一九九四：Web Ref: 5 CPR-TOL, 2012）、またポーランドのクラクフ大学からも名誉博士号を授与されている（マルクス一九九三）。

一八八三年から彼はオーストリア＝ハンガリー帝国の百科事典の仕事に取りかかり始める。これは、ルドルフの編による地誌の

百科事典で、ルドルフの携わったなかで最も重要な書物であり、ドイツ語とハンガリー語にて刊行された「言葉と絵でみるオーストリア＝ハンガリー帝国 (Die österreichisch-ungarische Monarchie in Wort und Bild (Wien, 1885-1902))」である。合計二四巻、五八七項目、四五〇〇の図表の大著であった (Web Ref: 5 CPR-TOL, 2012)。

ルドルフはこの本のスポンサーでありかつ、本の数多くの部分を執筆しており、通称「皇太子の労作」と呼ばれていた。内容は、帝国の各地域や各民族の歴史的、経済的、文化的独自性、生活習慣を細かに描いている。最初の巻は一八八五年一月一日にフランツ・ヨーゼフ皇帝に献呈された。序文はルドルフによって書かれたものであったがフランツ・ヨーゼフはこの時「本当に息子が序文を書いたのか？」と他の二人の編集者に尋ねたという (マルクス一九九三；Web Ref: 5 CPR-TOL, 2012)。

一八八九年一月三〇日ルドルフはマイヤーリンクの狩猟用館で男爵令嬢と自殺した。このとき皇帝狩猟用別荘ゲデーレの項目を執筆していたことがわかっている。死の直前の一八八九年一月二六日(土)にも、この百科事典のドイツ語版編集者ヨゼフ・フォン・ヴァイレンに、続巻の執筆内容について手紙を送っている。

「ご存じかと思いますが、軍務に忙殺されて、ゲデーレの外観図はまだ書いていません。やるべきことが多いうえ、どれも時間がかかります。しかし月曜日にはマイヤーリンクに行きます。そのときには、数時間空き時間を見つけれられると思いますので、ゲデーレの項目を書き上げたいと思います。……水曜日から木曜日に原稿をおわたししたいと思います。」

四日後ルドルフは自害し、最終巻がドイツ語、ハンガリー語で刊行されたのはルドルフの死後何年もたった後の一九〇二年であった。出版はルドルフの未亡人シュテファニーが支援し、著作集には「ルドルフ皇太子の提案と協力のもとに刊行されました」との言及がある（マルクス一九九三）。

一八八九年の皇太子ルドルフの死後、彼個人のものであった自然科学コレクションは当初ウィーン自然史博物館へと移された。彼の遺志は彼のコレクションをウィーン教育機関へ残したいというものだったので、地質、古生物、及び鉱物コレクションはその後「K. k. Hochschule für Bodenkultur 帝国王室農科大学：現ウィーン農科大学」の所有となった（Web Ref. 4 NHMW-Mineral, 1997）。

### へ一八七五年

ルドルフのサンゴ標本に話を戻すと、該当する標本番号（旧番号・アルト・ナンバー）は博物館の古いカタログ記録によると、一八七五年のページに記載されている。一八七五年は基本的にカタログに記録された（博物館に記録された）年と考えられる。するとサンゴが採集されたのは一八七五年かそれよりも前になる。

通常多くのヨーロッパ式の自然史博物館では、カタログに記録された年の他に標本ラベルに「採集した年月日、採集場所」を記載するものであるが、この標本にはそのような情報は無く、「日本」とだけ書かれているだけである。またカタログにあるサンゴに該当する番号は一つだけであるが、標本自体はその後「ウィーン博物館」の名前の元に新たな登録番号が二種類のサンゴに別々に振り直されている。また同時にサンゴだけではなく、他の生物標本も登録番号を与えられてカタログに記載されている。登録後誰もその学術的研究を行った形跡はなく、カタログには *Gorgonia*（ヤギ類・八放サンゴ亜綱の仲間）、標本ラベルにも *Gorgonia*, *Lophogorgia* 属、までの記述しかない。

これらのことから、これらのサンゴの採集は博物学者などのプロの研究者及びその知識のある人物による採集ではない可能性が大きい。また一八七五年から現在までの間、ウィーン自然史博

博物館にサンゴの研究者が在籍していたことはない。同様の科学的に問題がちよつとある標本には幕末に日本の出島にオランダの医師として来日したフランツ・シーボルトの標本や進化論で有名な英国の地質学者ダーウィンの標本などがある。これらの標本はラベルに標本の重要な情報である「採集した年月日と正確な採集場所」が欠けていることが多い。これにより標本自体の科学的な価値はかなり落ちるのだが、採集者の知名度により、別の意味で重要な標本となっている。

一八七五年の皇太子ルドルフはまだ一六歳。当時ウィーンから日本への往復の旅は通常一年以上をかけているようなもので、勉強修了前の皇太子がそのような極東へ旅することは立場的にも距離的にも考えられない。一八七五年のオーストリア皇室の挙動としては、エリザベート皇后がウィーンとバート・イシユルでわりあい長く滞在したのち、夏をフランス、ノルマンディーのサストの城館で過ごしていることが記録に残っているが、その他に目立ったものはない。

よってこれらの博物標本はルドルフへの献上品の可能性の線が濃厚である。標本ラベルとカタログに残る *Sr. Rais Hopeit* についての情報は調べた限りでは得られなかった。これらのサンゴ標本は、ウィーン農科大学へと移されたメインのルドルフの個人コ

レクションからとり残され、おそらくまったく専門家がいなかったため、その存在を忘れられ、今日まで保管されていたのかもしれない。

これがルドルフに献上されたものとする、標本採集を目的に訪日した人物（博物学者や商人）でもなく、オーストリア帝国の国関係者と考えられ、オーストリア帝国所有の船に乗船していた人物経由の標本と思われる。というのも、ヨーロッパの殆どの自然史博物館に所蔵されている博物標本（特にサンゴに関しては）のたぐいは、基本的に直接博物館及び大学の所蔵となっているからである。ミュンヘン州立博物館、ベルリン・フンボルト大学博物館、フランクフルト・ゼンケンベルク博物館、ハンブルグ動物学博物館（以上ドイツ）、ベルン博物館（スイス）、大英自然史博物館、ケンブリッジ大学動物学博物館（以上イギリス）、ライデン自然史博物館、アムステルダム大学動物学博物館（オランダ）、コペンハーゲン大学博物館（デンマーク）、ウプサラ進化博物館（スウェーデン）、の全てにおいて同様の日本産八放サンゴ標本で王室または皇室の関係者に直接献上されているものはこれまで一度も発見されたことはない。

日本産のものでわざわざ皇室関係者に寄贈されたものとしては、明治天皇（一八六八—一九一二）からフランツ・ヨーゼフ皇

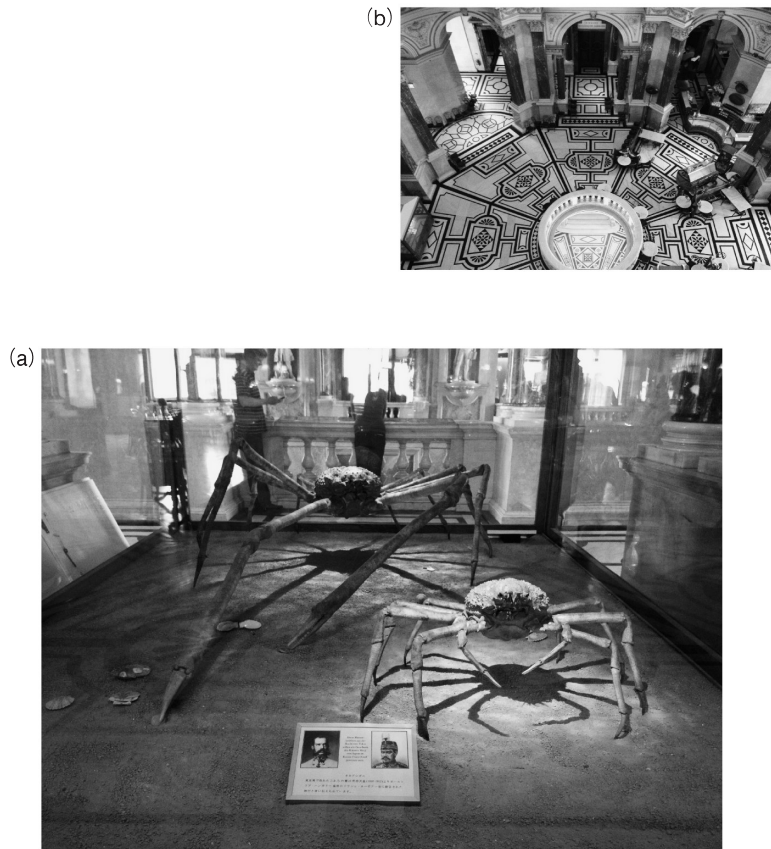


図5 (a) 明治天皇からフランツ・ヨーゼフ皇帝に贈られたタカアシガニの標本(1882年)。(b) ウィーン自然史博物館メインホール。左下にタカアシガニ展示キャビネット。

Photo. A. K. Matsumoto, 2012

帝に対してのタカアシガニ (*Macrocheira kaempferi*) 標本くらいしかない。これは現在ウィーン自然史博物館のメインホールに展示されており、フランツ・ヨーゼフ一世と明治天皇の言われのプレート(日本語とドイツ語)が飾ってある(図5)。これは東京湾からウィーンに一八八二年に来たということになっている。来たということなので、東京湾で採集されたとはっきりとわかっているわけではない。なお、二〇一二年に自然史博物館で出版した本の解説によると、タカアシガニは日本のシンボルとなっており、その為現在日本人はタカアシガニをほとんど食べないそうである(Ott et. al. 2012)。

またシーボルトの息子のハインリヒ・シーボルトも、一八八九年に日本コレクション五二〇〇点を、ウィーンの帝室ならびに王室の自然科学博物館に寄贈しているが、見返りにオーストリアの男爵位を得ている(原田・クライナー一九九六)。

このような博物標本が名入りで献上される場合、それは初めてそのような調査目的があり資金を皇室が提供している場合と、献上された皇室関係者（この場合は皇太子ルドルフ）がもともとそういった博物標本に興味がある場合の二パターンが考えられる。前者には女王陛下の名のもとに行われた英国のチャレンジャー調査航海、後者には生物学者であった日本の昭和天皇があてはまる。標本の写真とラベルは図2にあるが、これらの種類は基本的に相模湾以北で採集されるものではない。つまり横浜、東京、伊豆近辺で採集されたものではないと考えられる。では、どこで採集されたのか。

皇帝フランツ・ヨーゼフは皇妃エリザベートが外国を旅することには寛大だったが、皇太子に関しては話は別だったようである。皇太子ルドルフ亡きあとに皇太子になったフェルディナント大公が、一八九二年に訪日する際にもかなり渋ったとされ、エリザベートのとりなしで初めて皇室の水雷巡洋艦「エリザベート皇后」を任務の為に提供することに同意したという（クライナー一九九六）。よって、一八七五年、またはそれ以前の一六歳未満のルドルフが、極東で調査を行うことなど論外だっただろう。

へ一八七五年前後のオーストリアの海洋、及びオーストリアの日  
本来訪記録

では、どのような機会でのような人がこのサンゴを皇太子に献上したのだろうか。

オーストリアと日本の最初の邂逅は、個人的なものと帝国国家的なもの二種類がある。個人的なものとしては、一六二五年に平戸に数週間滞在した、貴族出身のクリストフ・カール・フェルンベルガーが最初という説がある。神聖ローマ帝国皇帝の将校であったが、三十年戦争に従軍しオランダの戦争捕虜となり、逃亡の途中何故か東アジア方面に連れて行かれた人物である。また、和親通商航海条約の前には、一八六七年以来、日本に住んでいたオーストリアのライムント・シュティルフリート男爵がいたことも知られている（パンツァー一九七三）。

帝国国家的な方面では、オーストリアはもともとはスペインのハプスブルク家を介して日本と関係を結んでいる。神聖ローマ皇帝（在位一五七六―一六一二）ルドルフ二世（一五五二―一六一二）は、徳川家康（一五四三―一六一六）から武器を贈呈されているという（クライナー一九九六）。また(1)カール六世（ハプスブルク・神聖ローマ皇帝、在位一七一一―一七四〇年、ハンガリー王、ボヘミア王、マリア・テレジアの父）統治下のオーストリア

領ネーデルランドの東印度会社（一七二〇年設立）と、(2) マリア・テレジアの晩年（在位一七四〇—）とヨーゼフ二世皇帝統治下のトリエステ人の東印度会社がある（パンツァー一九七三…注 Benedikt 1965; Bayer 1958; Randa 1966; 参照）。

オーストリア領ネーデルラント（一七二四—一七九〇、一七九九）は、現在のベルギーのほとんどとルクセンブルク、現在のベルギーのリュクサンブル州、ドイツのラインラント＝プファルツ州の一部の領域のことである。カール六世はスペイン系ハプスブルクに属していたネーデルラントとイタリアをオーストリアの領土とした。オーストリア領ネーデルラントは一七九四年オーストリアから離れフランスへ、一八一五年にナポレオン・ボナパルトが敗北したことによりネーデルラント連合王国へ併合、一八三〇年にベルギー国家として独立した。オーストリア東印度会社は、現在のベルギーのオストエンデにあった（パンツァー一九七三）。オーストリアの東印度会社は英国の戦略によって消えた。一七二四年、カール六世は「国事詔書（プラグマティッシュ・ザンクツイオン）」という帝国法を發布して女系の王位の継承を規定した（シュタットミュラー一九六六…テイラー一九四八）。これによりマリア・テレジアの相続が可能になった。イギリスはこの政策を承認する条件のオーストリア東インド会社の解散と引き

換えにして、一七三一年に政策を承認した。

一方オランダは、一六四八年にスペイン・ハプスブルク家の神聖ローマ・ドイツ帝国から独立しているが、その後も江戸期の間、依然として数多くのドイツ人がオランダ東インド会社を經由して日本に達していた（クライナー一九九六）。

日本で有名なフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト男爵 (Philipp Franz Balthasar von Siebold) (一七九六—一八六六) も、その一人である。シーボルトは植物学と医学を修めた後、一八二三年夏—一八二九年末までオランダ東インド会社（一七九九年オランダ東インド会社解散、一八一六年オランダ領インドネシア返還）に医師として雇われ、オランダ人として日本（長崎出島、オランダ商館）にやってきている。彼は、実はオーストリアと非常に深い関係がある。シーボルトは神聖ローマ帝国（＝オーストリア）の司教領ヴェルツブルク（現在のドイツ）に生まれた。シーボルト家は、神聖ローマ帝国皇帝フランツ二世（オーストリア国王フランツ一世）から爵位を授かった貴族であった。日本にはオランダ人と偽って入国している為、オランダ人と誤解されていることが多い。すこし詳しい人でヴェルツブルクがドイツであるのでドイツ人と認識されている。しかしながら当時のヴェルツブルクは神聖ローマ帝国領、そして神聖ローマ帝国の皇帝は

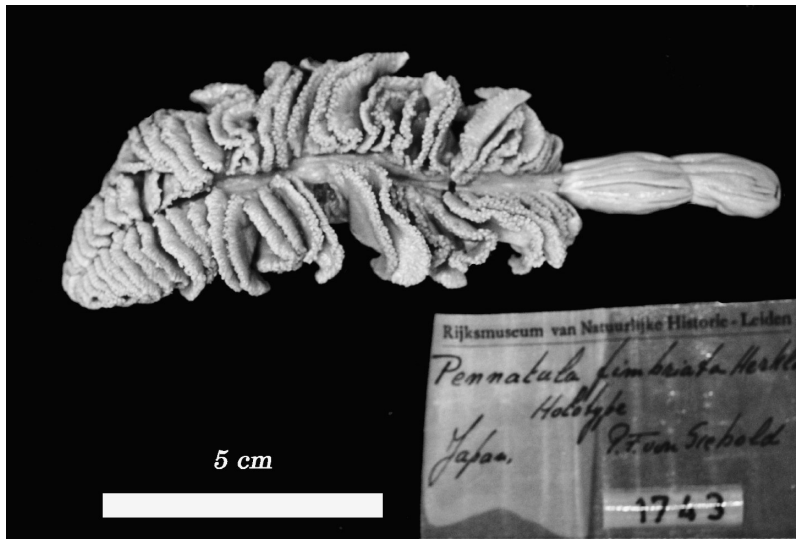


図6 シーボルト採集日本産八放サンゴ標本。

(RMNH1743, Leiden, Netherlands). *Pennatulula fimbriata* Herklot. 採集者の項に P. F. Von Siebold (シーボルト) の名前がある。正式な採集年月日及び採集地情報は無い。  
Photo: A. K. Matsumoto

ハプスブルク家が担っている時代であった。つまりシーボルトがどこに所属しているかと言えば、実は神聖ローマ帝国・ハプスブルク家から爵位を貰っている以上オーストリア帝国に所属しているというのが一番正しいのである。シーボルトの著作「日本」(日本、日本とその隣国及び保護国蝦夷南千島樺太、朝鮮琉球諸島記述記録集)はオランダのライデンから出版されるが、一八三二年にシーボルトはその著作の宣伝の為ウィーンを訪れ、皇帝フランツ二世、宰相メッテルニヒなどの招宴に出席した。この際に皇帝はシーボルト家の神聖ローマ帝国時代の旧爵位をオーストリア帝国の爵位に更新した(パンツァー&クレイサー一九八九)。実はシーボルトの一番の懸念事項は神聖ローマ帝国時代に授かった爵位が、神聖ローマ帝国が終了した後にも有効であるか、という点であったので、これはシーボルトにとっては最高の待遇であった。

一八二九年に日本追放になった際に、シーボルトは大量のコレクションを国外に持ち出した。生物標本は主にオランダの学際都市ライデン大学に所蔵されており、シーボルトが持ち帰った八放サンゴ標本は、学術的に調査された日本最初の八放サンゴとなった(図6)。しかしこれらの標本のラベルに、オランダ国王の名前が刻まれているわけではない。マリア・テレジアは、このライ

デン出身の医者で植物学者ニコラウス・フォン・ジャカンを世界各地に派遣して、熱帯・亜熱帯植物をウィーンに持ち帰らせようとし、ウィーンのシェーンブルン宮殿にオランダ庭園を造らせている(マルクス一八九七)。このシェーンブルン宮殿は、皇帝フランツ・ヨーゼフが生まれ、没した場所である。

一方、シーボルトはオーストリアの帝国図書館には日本の稀覯本(現オーストリア国立図書館所蔵)や絵画、古銭(現美術史美術館)のコレクションを仲介した(米倉浩司・梶田忠(二〇〇三)一(二〇一三年一月一三日))。またシーボルト商會を組織して、日本産植物の輸入取引の先駆けとなり(クライナー一九九六)、ウィーンのアマチュア造園家や植物学者に東アジアの植物の種をもたらした。シーボルトの著作「日本植物誌」(一八三七年)の中で、日本のシヤクナゲの一種ツクシシヤクナゲ(ツツジ科ツツジ属、筑紫石楠花)の学名に、宰相メッテルニヒ(学名: Rhododendron metternichii Sieb. et Zucc. ロードデンドロン・メテルニヒ)の名前を献名している(パンツァー&クレイサー一九八九)。ただし現在はこの名前はツクシシヤクナゲ Rhododendron japonheptamerum Kitam. var. japonheptamerum のシノニム(先に記載されていた種類のものと同種)とされている(米倉浩司・梶田忠(二〇〇三)一(二〇一三年一月一三日))。シ

ーボルトの標本のラベルに、現皇帝をよばして、皇太子の産まれる三〇年も前の標本が皇太子に献上され、皇帝ではなく皇太子の名前が記されるという事は考えがたい。シーボルトの生物標本はライデン自然史博物館に所蔵されているが、オランダ国王の名はなく、またシーボルトの名前が全く記録されていないこともありえない。以上の点から、ルドルフ標本がシーボルト採集による可能性はきわめて低い。

#### 〈H・M・S・ノヴァラ号世界一周調査航海〉

一八五三年に米国のペリーが日本を米国船の捕鯨の為に開国させたが、オーストリア海軍も一八五〇年代から東アジア遠征に関心があった。オーストリア帝国と日本は、共同の隣国を持っていた。ロシアである(パンツァー一九七三)。よってその後の日露戦争(一九〇四―一九〇五年)での日本の勝利はオーストリアにとって非常なる刺激となった(パンツァー&クレイサー一九八九)。しかし日露戦争以前のオーストリアは、皇弟マキシミアン大公のメキシコでの射殺事件などでその都度東アジア遠征計画は延期を余儀なくされていた。オーストリアは他の西欧列強に比べて東アジア進出がはるかに遅れていたのである。

フリゲート艦ノヴァラ号(Novara)によって一八五八―一八



五九年にかけて行われた世界一周調査航海は、オーストリア帝国にとって最初の海洋分野での挑戦であり、オーストリア君主制下で行われた名のあるプロジェクトであった。海洋学に関しては海流を調査するという目的をきっかけ、測深調査は科学に寄与したことで特に有名である。ウィーン科学アカデミーが調査航海を取り仕切り、ルドルフの教師をやった地質学者ホックスレッターとも一人の動物学者、ウィーン帝国自然史博物館のキュレーターであったフラウエンフェルト (Georg Ritter von Frauenfeld) が責任者であった (Web Ref. 7 Novara-Expedition; Web Ref. 8 Dworschak & Stagl)。ノヴァアラ号は二一〇七排水トン (displacement ton)、三五立方フィート (〇・九九〇五立方メートル) の海水の重量、二メートル法の一トン) であった (Web Ref. 9 KHM-Novara-Expedition, 2005)。

一八五七年四月三〇日、ノヴァアラ号は前述トリエステ港から出航した。五五一日間にわたる航海は、南アメリカ、アフリカ、インド、中国、オーストラリアをめぐるものであった (Web Ref. 7 Novara-Expedition)。この調査航海によるコレクションは、植物、動物 (標本数二六〇〇〇)、民族学資料としてオーストリアの各博物館に所蔵されている。成果としては、オーストリア科学アカデミーから「オーストリアフリゲート艦ノヴァアラ号による

世界一周旅行 “The Austrian Frigate Novara’s Journey around the World” というタイトルで、一八六一—一八七六年にかけて二一巻にわたる出版物が発行された。ホックスレッターによって一七世紀に絶滅した三メートルの大型鳥類「モア」の骨格標本が初めて科学的に記載されたものこの航海の成果であった (Web Ref. 7 Novara-Expedition)。H・M・S・ノヴァアラ号に関しては二〇〇四年に二〇ユーロ記念コインが発行されている。フランツ・ヨーゼフの弟マクシミリアン大公 (一八六七) が海軍将校としての人生を歩み始めたのは、このフリゲート艦「ノヴァアラ」号からで、メキシコ遠征に上る前はオーストリア海軍の司令官だった (マルクス一九八七)。

この時の調査航海計画では日本行きは予定には入っていた。一八五六年の地理学協会あての書簡では「スマトラ、ボルネオ、セレベス、フィリッピン旅行を更に遠方に企て、フィリッピン群島から清国日本まで旅行を延長すべきである。帝国の遠征隊は清帝国と日本に近づき易い一切の地点を出来るだけ広範囲に訪れた後で……を意図する」とシェルツァーは書いている (パンツァー一九七三) が、結局、日本海域には行かなかった。ノヴァアラ号の指揮官だったヴェラーストールフは、ノヴァアラ号航海の後に一八六〇年に東亜遠征の提案をしているが (パンツァー一九七三)、日本

での本格的な東亜遠征が行われるにはまだ日奥和親条約が締結される数年後を待たねばならなかった。

よって、標本の「日本」という記録を重視すると、ルドルフ標本がノヴァラ号航海で採集された可能性は非常に低い。

ノヴァラ号航海当時、皇室の船として有名なものとしては、王妃エリザベートが好んで使用した豪華ヨット「ミラマール号」があった。ミラマールとは、トリエステの近郊にあったアドリア海の絶壁の上に建てられているミラマール城館からとられている。

この館はフランツ・ヨーゼフ弟のフェルディナント・マクシミリアン大公が好んだ（江村一九九四）。

一八六〇年一月一七日にエリザベート皇后が、最初の長期転地療養としてマデイラ島へ行った際には、ヴィクトリア女王にイギリス王室の大型豪華ヨット「ヴィクトリア&アルバート号」を用立ててもらっている。当時オーストリア帝室には、冬の大西洋を乗り切れるほど頑丈なヨットがなかったため、イギリスからの申し出を受けている（ブラシユルIIピツヒラー一九九五）。この後も長期航海の時はヴィクトリア女王の持ち船を改造した汽船「オズボーン」号を使った。この時はウィーンを一月一七日に発ち、ベルギーのアントウェルペンから船に乗って大西洋を南下

し、マデイラ島の主都ファンシヤルをめざした（ブラシユルIIピツヒラー一九九五）（シャート一九九八）。マデイラからの帰途、王妃はセビーリヤ、ジブラルタル、マリョルカ（マジョルカ）に立ち寄り、地中海を東進してギリシア北西端のコルフ島（ギリシア語名ケルキラ島）に達した。コルフ島のガストゥーリの入り江には、「ミラマール号」を収容するために大理石の突堤が築かれた（ブラシユルIIピツヒラー一九九五）。マデイラ島でマンドリンを弾くシシイ（エリザベート皇后）の写真（図7）には明らかにルドルフ標本と同じ仲間の八放サンゴが写っている。これはルドルフの標本（日本・太平洋）とは異なる大西洋の種類であり、写真から実際に種を特定することは難しいが、おそらく漁船などで混獲されたものであろうと考えられ、水深が深いところのサンゴであると思う。

#### 一八六九年日英外交樹立

一八六八年、二隻のオーストリア海軍のフリゲート艦「ドナウ」号とコルヴェット艦「フリードリヒ大公」号がオーストリア領トリエステの港（現イタリア北東部にあるフリウリIヴェネツィア・ジュリア州の州都）から初めての東亜遠征を目的として帆を上げた。当時の船は蒸気と帆を併用していた（パンツァー一九



図7 ポルトガル、マデイラ島で女官（後列）及び姉ヘレーネ（前列）に囲まれるエリザベート（中央）。写真の下部に写っている樹状のものが、今回のルドルフ標本と同じ仲間の八放サンゴである。

ウィーン市歴史博物館。Credit photographiques: Musee historique de la ville, Vienne

七三、二〇〇九）。ウィーン—トリエステ間のオーストリア南部鉄道が一八五七年に完成している（パンツァー&クレイサー一九八九）ことから、おそらくこの鉄道経由でトリエステに向かったのだろう。トリエステはアドリア海に面したハプスブルク帝国の重要な港湾都市であり、現在はイタリア海軍の基地となっており一三八二年から第一次世界大戦後、オーストリア—ハンガリー帝国が崩壊する一九二〇年までの約五四〇年間オーストリア領であった。なお、このトリエステの名前を冠した有名なものとして、スイスで設計されたイタリアの潜水艇トリエステ号（Trieste）がある。地球上で最も深いマリアナ海溝深度約一〇九〇〇メートルの海底に達した最初の、そして二〇一二年までは唯一の有人記録を持つ潜水艇であった。

一八六九年九月、「ドナウ」号と「フリードリヒ大公」号は、喜望峯廻りのコースから特命公使の海軍大将アントン・フォン・ペッツを乗せて長崎に寄港し、一〇月一八日に、東京で

「和親通商航海条約」がオーストリア―日本間で締結された。海軍大将の職務指令としては遠征の軍事的性格を嚴重に抑え、商業上の利益を一番の目的とするというものであった（パンツァー一九七三、二〇〇九）。スエズ運河が開通したのはこの年（一八六九年）のことである。もともとトリエステからエジプトのアレキサンドリアまで頻繁に往復していたオーストリアは、オーストリア―ハンガリー帝国の東洋航路の絶世期を迎え、オーストリアの製品を輸出する市場として東洋へ施設を派遣するのに意欲的であった（パンツァー二〇〇九）。交渉団の中にはオーストリア・ハンガリー帝国極東調査団（一八六八―一八七一年）が含まれており（パンツァー&クレイサー一九八九）、第一事務官兼商業学術係長の商務省カール・フォン・シエルツァーと彼をサポートする経済関係の資料や、博物館用の品を収集する任務の専門家七名がいた（パンツァー一九七三、二〇〇九）。調査団は日本で芸術作品収集しており、現在オーストリア応用美術博物館に所蔵されている。この博物館の通信員として働いたのが前述したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの二人の息子で、二人の仲介により日本の万博展示品（一八七三年）とオーストリアの芸術作品を交換したり、展示品を購入したりしている（パンツァー&クレイサー一九八九）。兄、アレクサンダーは既に日本におり、外務省の

顧問として一八六七年から六八年にかけて幕府派遣の使節団とともに滞欧し、この和親通商航海条約交渉の際にも日本側からオーストリア施設の上陸に同行した。またこの際の天皇謁見の際に、オーストリア使節のドイツ語を明治天皇に通訳したのもアレクサンダーであった。この時の日本との条約交渉の際へのオーストリア皇帝からアレクサンダーへの感謝の文書が残っている（パンツァー一九七三）。一方、次男ハインリヒ・フォン・シーボルトは兄アレクサンダーの後を追って一八六九年に来日し、一八七二年からはオーストリア・ハンガリー帝国日本代表部に臨時通訳見習いとして雇われ日奥修好通商条約の批准交渉の際に通訳を務めた。その後同公使館の通訳官となる（パンツァー一九七三・クライナー一九九六）。兄アレクサンダーは、一八七一年に大蔵省の代表としてフランクフルトで最初の銀行券の印刷に立ち会っている（Körner 1967 in クライナー一九九六）。シーボルト）。条約の調印の帰路は、今度は完成していたスエズ運河経由でオーストリアに帰っている（パンツァー一九七三）。この時の日奥条約は、西欧諸国にとって非常に有利で、一方日本にとっては最悪の条件の条約で、不平等条約と呼ばれている。オーストリアの名誉のために付け加えると、この条約は大英帝国公使ハリパーキウスが条約の後ろ盾となり、オーストリアが列強の利点

確保に忠実になるよう推進した。これは、本来オーストリア側の意図したことではなかったという。オーストリア国自身の官吏が日本に赴任してくるまでは、英国の領事館員がオーストリア領事の職務を代行するという協定がこの英国公使パークスと結ばれた（パンツァー一九七三）。

一八六九年の明治天皇謁見の際に、オーストリア・ハンガリー帝国皇帝（フランツ・ヨーゼフ）からはベーゼンドルフアー社のグラントピアノ、オーストリア皇帝の大理石の立像、クリスタル・グラスの花瓶、ハンガリー製の馬具、オーストリアハンガリー帝国のコインと写真集が（パンツァー一九七三、二〇〇九）、明治天皇からは返礼として、漆罨、古い青銅器と、太刀一振り（パンツァー一九七三）、木版画と陶磁器を贈られた（パンツァー二〇〇九）。

この年はオーストリアによる北極調査航海（一八六九—一八七四年）も行われている。

実際に国交が樹立され、公式の来日が行われるようになったこの年代から、日本産標本が採集されはじめていると考えるのが最も妥当と思われる。

一方明治政府の方も、近代国家建設の為に雇い外国人を次々

と招聘した。オーストリアからは基本的に医学系と音楽系が招聘された。一八七二年からウィーンの医者、F・A・ユンカー・フォン・ランゲグ博士の指導により京都府立医科大学が創立され、彼も教鞭をとった。またウィーン大学で医学を学びオーストリア・ハンガリー公使館付医官として来日したアルブレヒト・フォン・ローレッツ博士（Albrecht Von Roretz, 1846-1884）も、一八七六年愛知県公立医学校（現名古屋大学医学部）、一八八〇年石川県立金沢医学校（現金沢大学医学部）、山形県の済生館で教鞭をとっている（パンツァー二〇〇九）。彼らは自然科学の分野でも標本採集を行った可能性もあるが、博物館に残されている八放サンゴ標本に彼らの名前は残っていない。もし標本があれば、名前が残されているのが一般的である。

〈ウィーン万国博覧会（一八七三年五月—一月）〉

ウィーンと日本の関係が一気に近づいたのは、一八七三年のウィーン万国博覧会である。年代的にもルドルフ標本の一八七五年と合致する。

一八七二年一月二日、当時のオーストリア駐日公使ハインリヒ・フォン・カリーツェ（Heinrich Freiherr von Calice）がファザーナ号により訪日しており、フランツ・ヨーゼフ皇帝から明

治天皇への日本の万博参加を希望する親書を渡している。この時の万博日本委員団は、オーストリア使節団と逆の経路を辿りトリエステで船を降りてウィーンにやってきている。万博の日本部門のシンボルとなったのは名古屋城の金の鯨であった。万博をオーストリアから日本への貿易を更に活性化させる機会として、ウィーンの商人は「東洋ならびに極東委員会」を設立した。この委員会は一九七四年に、正式に「東洋貿易経済会社」となり、「東洋(東洋?) 博物館」を設立した(パンツァー&クレイサー一九八九)。この万博ではフランツ・ヨーゼフ皇帝とエリザベート皇后も五月五日にプラーターの日本庭園に行幸している(パンツァー一九七三)。

このウィーン万博の年の夏には岩倉具視をはじめとする岩倉使節団もウィーンを訪れていた(パンツァー二〇〇九)。フィリップ・シーボルトの次男ハインリヒ・フォン・シーボルトは、ウィーン万国博覧会準備委員会に日本政府の連絡員として起用されており万博の間ウィーンに滞在した。長男アレクサンダーは岩倉使節団とウィーンの日本公使館に勤務していた(パンツァー一九七三)。博覧会で展示した出品物の大半を日本政府が売買するのにあたって二人は尽力した。アレクサンダーは一八六九年から、ハインリヒは一九七二年からオーストリア美術及び産業博物館

(österreich. Museum für Kunst und Industrie) (現在の国立工芸美術館 *Museum für angewandte Kunst, Wien*) の特派員であったので、主な展示物を譲渡されている。また前述のウィーン東洋博物館 (*Orientalisches Museum*) も主な展示物を譲渡された。ハインリヒはまた、ウィーン万博の際にライプツィヒ民族学博物館 (*Museum für Völkerkunde, Leipzig*) の特派員でもあったため、この博物館も展示物を購入出来た(クライナー一九九六; シーボルト)。この万博の後、一九七四年に日本に戻り、公使館付きの員外通訳官を務めた。一八八七年から一八八九年までウィーンの外務大臣あての報告を担当し、一八九一年から一八九四年まで臨時総領事代理であった(パンツァー一九七三)。

一八七三年にはオーストリアハンガリーの日本遠征隊がまた行われた。主として商業上の目的であったが、実際上の仕事と目標には学問上の課題もあった。ハンガリーのヨハン・クサントウスとランゾネー男爵は動物学と民族学の研究を引き受けている。クサントウスはハンガリー・ペシュトの国立博物館のための博物学のコレクションも上げおっていたが(パンツァー一九七三)、このあたりでルドルフへのサンゴ標本が採集された可能性はとても高い。その他にも、ベラ・セーチェニ伯爵とオースト

リアーハンガリー帝国陸軍中尉グスタフ・クライトナーは、一八七三年六月に長崎に着いた。その後神戸、有馬温泉、大阪、京都、富士山、東京まで同行し、セーチェニイは日光、京都、クライトナーは北海道、室蘭、札幌、小樽へと旅立っている（パンツァー一九七三）。

その他には、一八七四年（明治七年）と一八七五年、コルヴェット艦フリードリヒ大公号が世界周航の途次横浜に投錨している。艦長はトーピアス・フォン・エースターライヒャー海軍大佐であり、彼が横浜で金星の太陽面通過を観測しようと思ったのであった（パンツァー一九七三）。一行中の砲台指揮官の海軍少佐ヨーゼフ・フォン・レーネルトは、明治天皇に拝謁するため浜離宮を訪れ、見聞録を残している（クライナー一九九六a、パンツァー一九七三）。この船も时期的にルドルフ標本を採集した時期と重なるが、もともと学術目的ではない航海で、自然科学系の調査目的の学者が乗船している可能性は低いと思われる。

実はウィーン自然史博物館にはルドルフの他にもドラシーエ（Drasche）という人物によって採集された標本が二点ある。

NHMMW2435 (A. N. 1822)

*Euplexaura curvata* Kükenthal, TYPE;

NHMMW2426 (A. N. 1817)

*Meliodes flabellifera* Kükenthal, TYPE;

NHMMW8047

*Acabaria japonica*

Enoshima, Geschenk des Freiherrn Dr. Richard v. Drasche.

の三つである。

ドラシーエの名前は、実はヨーロッパの博物館に所蔵されている日本の八放サンゴ類の標本採集者としてしばしば見かけるリヒャルト・ドラシーエ・フォン・ヴァルテインベルク男爵のことであり、有名な学者と工業化一門の出身である。一八七五年から一八七六年にかけて行われた極東研究の旅の途上で日本の首府（東京）を調査した。帰国後ドラシーエは、収集品を自然誌宮廷博物館に寄贈した。ドラシーエは、医師アルブレヒト・フォン・ローレッツ博士と研究旅行をしている。ローレッツ博士は名古屋に解剖学と法医学の施設を創立し、丸四年間名古屋に滞在した。ロー

レッツ博士の弟子の日本人医師に後藤新平がいる（パンツァー九七三）。ドラージェの調査・採集の方向性は、まさにルドルフ標本と一致している。しかしながら、ウィーン自然史博物館においても他のヨーロッパの博物館においてもドラージェ標本は、ドラージェが採集者として標本ラベルかカタログ（台帳）に記録されて、はっきりと判別可能であることが普通であり、標本も今回のルドルフ標本とは異なり、しっかりと整理されていることが多い。

ルドルフ標本は、ほぼ未整理であったことと、ドラージェの名が残されていないことから、ドラージェの採集によるものではないと思われる。

これまで一八七五年に到るいくつもの日本の採集調査をあげてきたが、最もありうるものが一八七三年のオーストリアハンガリー日本遠征隊である。担当したヨーハン・クサントウスとランゾネー男爵の名はルドルフ標本のラベル及びカタログには残されていないが、同時に複数の生物標本が採集され、未整理のまま現在まで保管されていたのではないだろうか。しかし明らかな証拠は今回の資料からはみつけられなかった。

#### 〈その後のオーストリア海軍と日本〉

ルドルフの標本の採集及び記録の一八七五年以降もオーストリアは日本と関係を持ち続けた。

一八七七年、アメリカ人の動物学者、かつ東京大学法理文学部生物学教授のお雇い外国人・エドワード・シルベスター・モースが、横浜から品川に向かう列車の左側の窓から大森貝塚を発見した。同年一〇月九日、約二五〇年前の縄文後期・晩期の大森貝塚の発掘を大規模に開始し、一八七九年（明治十二年）、Shell Mounds of Omori (Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan, Volume 1, Part 1) 及び「大森介墟古物編」（東京大学法理文学部印行「理科会粹第一帙上冊」）で発表した。モースが発見したのと同じ一八七七年、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男ハインリヒ・フォン・シーボルト（通称小シーボルト）が同大森貝塚の発掘に着手していた。ハインリヒは、実際には日本語を習得していたとはいえず、漢字は読めず、翻訳者としてはいまいちであったという説もある（クライナー一九九六b）。彼は大学教育を受けておらず、それを補うため日本のコレクションを代償にコペンハーゲン国立博物館館長イェンス・J・ウォルセー（Jens Jacob A. Worsaae）に教えを乞うたり、ベルリン国立先史学博物館、ウィーン民族学博物



館にも贈ったりしていた。ハインリヒが発掘につとめた貝塚は七カ所あり、うち二カ所は、当時のお雇い外国人のドイツの地質学者ナウマン（ナウマン象に名前を残す）が発見し、ハインリヒによるとハインリヒに「任せた」ものであったという（Siebold 1879a: 231 in クライナー 一九九六b）。ハインリヒは、休暇などを利用してモースよりも多くの貝塚を発掘し、北海道アイヌの調査なども行っていたが、それは前述のクライトナーに同行した休暇によるものであった（パンツァー 一九七三）。論文も自費出版していたが、学説としては父シーボルトの見解を受け継いだものであった。モースはハインリヒ論文の意義を考古学的に高く評価したものの、学問的な訓練を受けていないことから「論文」としての論理構造や体裁に不備及び欠陥があることを指摘している（原田 一九九六b）。実際ハインリヒの残した論文は、紀行文としてはともかく、論文としては稚拙な出来と言わざるを得ない。結局は専門知識を持ち本業で研究を行ったモースと異なり、学問を完遂することはなかった（クライナー a b）。

前述したとおり、一八六九年、オーストリアⅡハンガリー帝国と明治政府は修好通商条約を結んだが、オーストリアⅡハンガリー帝国は日本にとって最後の条約締結国であると同時に、最悪の不平等条約を結んだ相手となった。ハインリヒは、一八六九年

（明治二年）に締結された不平等条約の改正の為の一八八六年（明治一九年）に条約改正会議ではオーストリアの顧問と通訳の二役で出席し、兄のアレクサンダー・フォン・シーボルトが日本代表団の一員として、外務大臣井上馨の顧問を務めた（クライナー 一九九六a）。アレクサンダーはまた、英国公使館通訳としても勤務していた（パンツァー 一九七三）。

一八七九年（明治一二年）から一八八一年までの二年間、ドイツの動物学者ルートヴィヒ・ドゥーダーライン（デーデルライン）が日本の東京大学医学部のお雇い外国人講師をつとめ、のちにシュトラスブルク大学及びミュンヘン大学教授をつとめた。デーデルラインは一八八〇年（明治一三年）に奄美を採集調査旅行に訪れた。デーデルラインは奄美研究旅行について、OAG（ドイツ東アジア協会）の機関誌 *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*. Bd. 3, Nr. 23, 1881 及び、*ドイツ・シュトゥットガルトの Das Aus-land*, Bd. 54, Nr. 27 で発表している（クライナー 一九九六）。デーデルラインの学術調査は日本の海産無脊椎動物相を広く網羅したはじめてのものであり、シュトラスブルク大学博物館（フランス）、ベルリン・フンボルト博物館（ドイツ）などに所蔵されて

いるが、ウィーンとの関係はなかったようである。

一八八五年（明治一八年）、オーストリア国防大臣マックス・ダウブレスキー・フォン・シュテルネック提督はオーストリアハンガリー帝国海軍の定期的な東アジア海域派遣を開始した（クライナー一九九六）。彼本人は、日本旅行に行くこと自体は出来なかったが、彼の指揮下の艦船が海外の海岸で商業上の研究航海を行うことによりオーストリアの海外貿易を援助した（パンツァー一九七三）。八五年から一八八六年にかけて軍艦のバークスクーラー船ナウティルス号がアジアに派遣され、三ヶ月以上日本に滞在した。続いて一八八七年にはアウローラ号が函館から宮古経由で横浜まで航海した。これらの船のいくつかは、動物学、植物学、民族学の資料を集め、それらはウィーン自然誌博物館に所蔵された（パンツァー一九七三）。

浜離宮が延遼館となつてから最初の貴賓のひとりに、レオポルト・フェルディナント大公がいる。海軍士官候補生として一八八七年（明治二〇年）、東アジアを目指して、ポーラ（クロアチアの都市）、元オーストリアハンガリー帝国の軍港を出航したコルヴェット艦ファザーナ号で軍務を務めた。ファザーナ号は、開

港されてはいなかった沖縄の那覇港に入港し一八八八年（明治二一年）に士官を上陸させている。レオポルト・フェルディナントは、一八八八年（明治二一年）に横浜に上陸し浜離宮内の延遼館で歓待された。この時の延遼館での記録にも小シーボルト（ハインリヒ・フォン・シーボルト）が同席している（クライナー一九九六a、パンツァー一九七三）。

一八八九年の皇太子ルドルフの死後オーストリアの帝位継承者となつたフランツ・フェルディナント大公が、一八九三年（明治二六年）に世界一周旅行の途上で、戦艦「カイゼリン・エリザベート」号で、日本を訪問した（マルクス一九八七、パンツァー二〇〇九、クライナー一九九六）。一八九二年から一八九三年の水雷巡洋艦エリザベート皇后号によるフランツ・フェルディナント大公（一八六三—大正三年）の、日本を含む東アジア各海域の巡航は、海軍に対し洋上航海訓練の機会を多く与え、海洋研究の契機にしたいとフランツ・ヨーゼフ皇帝が考えたからであると、述べている（フェルディナント一八九五／一八九六）。更なる目的として、遠洋派遣を機に君主制を不動のものとし、商業政策上の権益獲得を有利に推し進めたいというのがあった（フェルディナント一八九五／一八九六）。船の名称はもちろん、皇妃エリザ

ペートにちなんでいる。

フェルディナント大公は、トリエステ（当時オーストリアハンガリー帝国領。現イタリア北東部の港湾都市）から出航し、スエズ運河から紅海に抜け、セイロン（スリランカ）に向かい、更にインドからオーストラリア、ソロモン諸島、ニューギニア、ポルネオ、香港、広東を経由して、最後に日本に寄港した（クライナー一九九六・フェルディナント一八九五／九六）。この時、ウィーン自然史博物館学芸員助手の男爵ルートヴィヒ・ロレンツ・フォン・リブルナウ博士、剝製製作者エドゥアルト・ホデク、おおかえ猟師フランツ・ヤナーチェクが参加している（フェルディナント一八九五／九六）。ただしサンゴ類の標本はウィーン自然史博物館には存在しておらず、海産生物の採集は行わなかったのではないかと思われる。

一八九三年（明治二六年）八月二日・長崎に来航、熊本の三角港経由で、フランツ・フェルディナント大公は三週間日本に滞在（一回目の日本寄港）した（マルクス一九八七、クライナー一九九六）。長崎入港時には、港内に日本の護衛艦が停泊し、旗艦「巖島」「松島」「高雄」「高千穂」「開聞」「葛城」「八重山」が迎えた。これら日本艦は最新鋭の構造と船舶技術と砲備を持つものであった（フェルディナント一八九五／九六）。当時の日本は、

総トン数五五〇五三、総馬力七九六九四、大砲総数四三九門、総兵員数六八一五名を擁する軍艦五五隻を持っていた（フェルディナント一八九五／九六）。当時の日本海軍に関して、日本は、海軍の形成を周到に意図しており、海軍兵学校はめざましい成果をあげていると感想を述べている（フェルディナント一八九五／九六）。

八月二三日横浜ではまた当時オーストリアハンガリー帝国の横浜領事代理のシーボルト男爵（ハインリヒ・フォン・シーボルト）が同行した（フェルディナント一八九五／九六）。八月二十五日まで浜離宮に滞在したが、この間にまたもやハインリヒが案内役をし、東京・上野に行き遊興したという（フェルディナント、フランツ一八九五／一八九六：Köhner 1967: 540 in クライナー一九九六b）。

滞在中、収集に熱狂したオーストリア大公が贈り物や購入した物品は、民族学上の資料一八〇〇〇、自然科学上の資料一四〇〇〇、計約三三〇〇〇点も及び、現在のウィーン民族博物館の日本部門のほとんどの所蔵品となっている。これらは、ウィーン自然史博物館の学芸員助手フォン・リブルナウ博士により整理され、オーストリア帰還後、一八九四年（明治七年）にウィーン・ベルヴェデーレ宮殿で一八〇〇〇点ほどが展覧会で一般公開された

(パンツァー二〇〇九・フェルディナント一八九五/九六)。

九月一六日・横須賀から横浜に帰港、九月末・横浜を発ちオー  
ストリアに帰還、フランツ・フェルディナント大公はカナダの蒸  
気客船(中国の皇后)号で太平洋を横断しバンクーバーとニュー  
ヨークへ向かい、一〇月にウィーンに帰国した。

個人の来日記録としては、ウィーンの裕福な大工場経営者の息  
子アドルフ・フィッシャー(一八五六一―一九一四)が美術品を収  
集するために生涯に三度(パンツァー二〇〇九)と二度(フィッ  
シャー二〇〇二)訪日し、その収集品を元に一九一三年ケルン東  
洋美術館が設立されている。一回目は一八九二年(明治二五年)、  
二回目は日清戦争の一八九四―一八九五年であった(安藤二〇〇  
一)。また、来日はしていないが、グスタフ・クリムト(一八六  
二―一九一八)も日本ブームの中心となり、日本をテーマとした  
美術展を一九〇〇年に開いている(パンツァー二〇〇九)。

皇妃エリザベト号はその後一八九九年六月八月、東アジア  
へ歴訪し日本に寄港しており、更に日本へ親善航海として横浜開  
港五〇周年記念祝典に参列している。この船はその名を貰ったエ  
リザベトのとおりに数奇な運命をたどる。一九一四年にサラエボ  
でフェルディナント大公が暗殺され、第一次大戦が勃発した際、

エリザベト皇后号はドイツの租借地であった青島へ行き防衛戦  
に参加、最後は自沈した。乗組員は戦争捕虜として日本に送られ  
た(クライナー一九九六・フェルディナント一九九六)。

二〇世紀初頭、ハプスブルク帝国は亡び、その後オーストリア  
が日本方面で海洋学術研究の目的で調査等を行った記録はない。

前述のお雇い外国人医師アルブレヒト・フォン・ローレッツ博  
士の弟子、後藤新平(一八五七―一九二九年)は後年東京市長  
(一九二〇―一九二三年)、外務大臣(一九一八年)をつとめ、以  
下のように語っている。「初めて目にした軍艦はオーストリア海  
軍の軍艦だった。当時、日本には一隻の軍艦もなかった。しかし  
今オーストリアは、一隻の軍艦ももっていない」(パンツァー&  
クレイサー一九八九)。

日本は周囲を海に囲まれ、すべての国境が海にあることもあ  
り、その後も海軍や海上保安庁などが現在も続いている。一方、  
オーストリアは第一次世界大戦での敗戦と共に海に面した領土も  
ハプスブルク帝国も失った。オーストリアの海への挑戦の歴史  
は、現在ウィーンの自然史博物館に眠っているのみである。

謝辞

以下の方々に感謝いたします。故磯野直秀先生、ウイーン自然史博物館の Dr. Sattman、標本をぎんぎんとくれた Mr. Stefan、テルアビブ大学の Dr. Benayahu。

引用文献

- Iris Ott, Brigitta Schmid, Reinhard Golebowski, Christian Köberl. 2012. "NHM TOP 100." Edition Lammerhuber, Verlag des Naturhistorischen Museums, Vienna. pp. 232.
- 安藤勉 二〇〇一「明治日本印象記」訳者あとがき (二) 金森誠也・安藤勉訳 アドルフ・フィッシャー 一八九七「明治日本印象記」講談社 p. 448-455
- 江村洋 一九九四 フランツ・ヨーゼフ ハプスブルク「最後」の皇帝 東京書籍 413+V
- 加藤雅彦 一九九五「凶説 ハプスブルク帝国」河出書房新社 pp. 131
- クライナー、ヨーゼフ 一九九六「江戸・東京の中のドイツ」安藤勉訳 二〇〇三 講談社 東京 (Kreiner, Josef 1996 "Deutsche Spaziergange in Tokyo." IUDICIUM Verlag GmbH, München)
- クライナー、ヨーゼフ 一九九六「ハインリッヒ・フォン・シーホルト 日本考古学・民族文化起源論の学史から」p. 227-265. (シーホルト、H・V 一八八一「小シーホルト蝦夷見聞記」原田信男、H・スパンンチ、J・クライナー訳注 一九九六 平凡社 pp. 299)
- クレマン、カトリヌ 一九九二「知の再発見」塚本哲也監修 双書95 「皇妃エリザベート ハプスブルクの女神」一九九七 創元社 pp. 190 (Clement, Catherine 1992. Sissi L'imperatrice anarchiste. Copyright Gallimard 1992. Japanese translation rights arranged with Editrion Gallimard through Motovun Co. Ltd.)
- コーン、ハンス 一九六一「ハプスブルク帝国史入門 The Habsburg Empire 1804-1918」稲野強・小沢弘明・柴宜弘・南塚信吾共訳 一九八二 恒文社 pp. 293+34 (Kohn, Hans 1961 The Habsburg Empire 1804-1918. New York/Toronto/London/Melbourne)
- コーナー、ハンス 一九六七 邦訳竹内精一 一九七四 訳「シーホルト父子伝」創造社 東京 (Körner, Hans 1967 Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts, Deutsches Familienarchiv vol. 34/35 = Quellen und Beiträ: ge zur Geschichte der Universita: t Würzburg vol. 3; Neustadt/Aisch)
- Kronprinz Rudolf von österreich. 2005 Zu Tempeln und Pyramiden? Meine Orientreise 1881. Edition Erdmann GmbH, Lemmingen.
- シーホルト、H・V 一八八一「小シーホルト蝦夷見聞記」原田信男、H・スパンンチ、J・クライナー訳注 一九九六 平凡社 pp. 299 (Siebold, Heinrich von (1) 1881 Ethnologische Studien über die Aino auf der Insel yesso. (2) 1878 Das Pfeilgift der Ainos. (3) 1959 「北海道歴観卑見」(大隅文書)
- シャート、マルタ 一九九八「皇妃エリザベートの生涯」西川賢一訳 二〇〇〇 集英社 (Schad, Martha 1998. Elisabeth von Österreich by: Copyright ? 1998 by Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, Munich/Germany Japanese translation rights arranged with Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, Munich/Germany through Japan UNI Agency Inc., Tokyo.)
- シユタット、ゲオルク 一九六六「ハプスブルク帝国史 中世か

- ら一九一八年まで」矢田俊隆解題 丹後杏一訳 一九八九 刀水書房 pp. 246 (Stadtmüller, Georg 1966 *Geschichte der habsburgischen Macht.*)
- テイラー、A・J・P 一九四八「ハプスブルク帝国 1809～1918年」倉田稔訳 一九八七 筑摩書房 pp. 400+8 (Tayler, A. J. P. 1948 *The Habsburg Monarchy 1890-1918, A History of the Austrian empire and Austria-Hungary.* Penguin Books, London.)
- Hamann, Brigitte 1979 *Kronprinz Rudolf. Private und politische Schriften.* Amalthea-Verlag, Wien, München.
- 原田信男 一九九六「ハンニンリッヒ・フォン・シーホルトと北海道」p. 267-296. (シーホルト, H・V 一八八一「小シーホルト蝦夷見聞記」原田信男, H・スペインシチ, J・クラインナー訳注 一九九六 平凡社)
- ハンツァー、ペーター 一九七〇、一九七三「日本オーストリア関係史」竹内精一、芹沢ユリア訳 一九八四 創造社 (Pantzer, Peter 1973. 1. *Japan und österreich-Ungarn. Die diplomatischen, wirtschaftlichen und kulturellen Beziehungen von ihrer Aufnahme bis zum Ersten Weltkrieg.* Wien, Eigenverlag, 1973. (Beitra : ge zur Japanologie : Veröffentlichungen des Instituts für Japanologie der Universita : t Wien. Bd. XI, Pantzer, Peter 1970. 2. *Hundert Jahre Japan - österreich Tokyo, Nichi-O-Kyokai, 1970.)*
- ハンツァー、ペーター・クレインサ、ユリア 一九八九「ウィーンの日本 欧州に根づく異文化の軌跡」佐久間稔訳 一九九〇 サイマル出版 会 pp. 191 (Pantzer, Peter; Krejsa, Jura 1989. *Japanisches Wien. Die Spuren einer fremden Kultur in Europa.* Herold Verlag, Wien.)
- ハンツァー、ペーター 二〇〇九「特別友国」「不平等条約」ベヌスター
- した140年間のオーストリアと日本の関係」ユッタ・シュテファン＝バ  
ストル監修「修好140周年記念 日本とオーストリアの友好関係をよりか  
やくせよ」p. 194-204 (Pantzer, Peter 2009. "Der bestmögliche  
freundschaftliche Partner" in *Botschafterin Dr. Jutta Stefan-Basil*  
Ed. "österreichisch-Japanische Begegnungen. 140 Jahre freunds-  
chaftliche Beziehungen. Impressum Band I." Bundesministerium  
für europa : ische und internationale Angelegenheiten / österrei-  
chische Botschaft Tokio. p. 18-32.)
- フインツァー、アドルフ 一八九七「明治日本印象記」金森誠也・安藤勉  
訳 二〇〇一 講談社 pp. 455 (Fischer, Adolf 1897 *Bilder aus*  
*Japan.* Verlag von Georg Bondi, Berlin.)
- フェルディナント、フランツ 一八九五、一八九六「オーストリア皇太子  
の日本日記 明治26年夏の記録」安藤勉訳 二〇〇五 講談社 pp.  
237 (Ferdinand, Franz 1895/96 *Erzherzog von österreich-Este :  
Tagebuch meiner Reise um die Erde 1892-1893.* 2 Bde. Wien : Alfred  
Hölder 1895/96.)
- フランチェルリッヒ・ムンバー、ガブリエーレ 一九九五「皇妃ヨリザンートの  
真実」西川賢一訳 一九九八 集英社 pp. 251 (Prasch-Bichler, G.  
and Cachee, J. 1995 *Kaiserin Elisabeth privat.* Amalthea in der F. A.  
Herbig Verlagsbuchhandlung GmbH, Wien/ München/Berlin.  
*Japanese translation published by arrangement with Buchverlage*  
*Langen Muller Herbig through The English Agency (Japan) Ltd.)*
- Bayer von Bayersburg, Heinrich 1958 *Die k.u.k. Kriegsmarine auf*  
*weiter Fahrt.* Wien.
- Benedikt, Heinrich 1965 *Als Belgien österreichisch war.* Wien-Mün-

chen.

マルクス・ゲオルク 一九八七「ノブス・ノクタ夜話 古巻良抄ノブーン」

江村洋訳 一九九二 河出書房新社 293pp. (Markus, Georg 1987:

G'schichten aus Osterreich. Copyrights: Amalthea Verlag Ges. m. b. h., Wien/München. The Japanese translation rights arranged with Buchverlage Ullstein Langen Mueller, München, Germany through ORION LITERARY AGENCY, Tokyo.)

マルクス・ゲオルク 一九九三「うたかたの恋と暮泥棒」浅見光康 一九

九七 青山出版社 pp. 268 (Markus, Georg 1993 Kriminalfall

Mayerling. Leben und Sterben der Mary Vetsera. 1993 Amalthea Verlag Ges.m. b. H, Wien, München. Japanese translation rights

arranged with F. A. Herbig Verlagsbuchhandlung GmbH, Munich through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.)

Randa, Alexander 1966 Österreich in übersee, Wien

米倉純三・梶田尚 (1993) 「BG Plants 和名・学名・ドメインズ」

(YList), [http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist\\_main.html](http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html) (1

〇一三年一月一三日)

## Web References

1 • NHC

[http://www.habsburger.net/en/chapter/natural-history-collec-tions?language=de](http://www.habsburger.net/en/chapter/natural-history-collections?language=de)

2 • NHM-Wien-overview, 2011

“Museum of Natural History in Vienna” (overview), Naturhistor-isches Museum Wien, 2011, webpage: [NHM-Wien-overview:](http://www.nhm-wien-overview.at/)

<http://www.nhm-wien.ac.at/d/museum.html>

3 • NHMW-history, 2011

“History (Hauptframe)” (overview), Naturhistorisches Museum, Vienna, Austria, 2011, webpage: [NHMW-history: http://www.nhm-wien.ac.at/NHM/Zoo/welcomeis\\_ehtml](http://www.nhm-wien.ac.at/NHM/Zoo/welcomeis_ehtml)

4 • NHM-Wien-Mineral, 1997

“The Beginning” (history with founding of the Naturhistorisches Hofmuseum), Natural History Museum of Vienna, January 1, 1997, NHM-Wien-Mineral: [http://www.nhm-wien.ac.at/NHM/Mineral/Homepage\\_MA\\_E.htm#BM6](http://www.nhm-wien.ac.at/NHM/Mineral/Homepage_MA_E.htm#BM6)

5 • CPR-TOL, 2012

Crown Prince Rudolf—Traces of a life, Fachgruppe Wien der Freizeit-und Sportbetriebe der Wirtschaftskammer Wien ([http://www.freizeitbetriebe-wien.at/guides/download/KPRudolf/Finales%20Handout\\_eng.pdf](http://www.freizeitbetriebe-wien.at/guides/download/KPRudolf/Finales%20Handout_eng.pdf))

6 • CPR-museum notes, 2006

“Crown Prince Rudolf (1858-1889)” (museum notes), Natural History Museum of Vienna, 2006, NHM-Wien-Rudolf: [http://www.nhm-wien.ac.at/NHM/Mineral/Rudolf\\_e.htm](http://www.nhm-wien.ac.at/NHM/Mineral/Rudolf_e.htm)

7 • Novara-Expedition

[http://www.novara-expedition.org/en/e\\_geschichte.html?](http://www.novara-expedition.org/en/e_geschichte.html) 2002, 2003, 2004, 2005 Mag. Christoph H. Benedikter, Philipp Kreidl, Dr. Peter Rohrbacher, NOVARA-expedition?, Dogma3 Werbung Kultur- und Projektmanagement GmbH

8 • Dworschak, P. C. & Stagl, V.

“The Crustacean Collection of the Museum of Natural History in Vienna” (history), Peter C. Dworschak & Verena Stagl, 3rd Zoological Dept., Naturhistorisches Museum, Vienna, webpage (@www.nhm-wien.ac.at): <http://www.nhm-wien.ac.at/nhm/3Zoo/PosterV2.pdf>

9 • KHM-Novara-Expedition, 2005

“Novara-Expedition” (port-by-port description), Kunsthistorisches Museum Wien, 2005, webpage: KHM-Novara-Expedition, [http://www.khm.at/entdeckungen/nova/nova\\_st15.htm](http://www.khm.at/entdeckungen/nova/nova_st15.htm)

10 • Fachgruppe Wien der Freizeit- und Sportbetriebe der Wirtschaftskammer Wien: [www.freizeitbetriebe-wien.at](http://www.freizeitbetriebe-wien.at)

11 • Fleming, C. A. ‘Hochstetter, Christian Gottlieb Ferdinand von - Biography’, from the Dictionary of New Zealand Biography. The Ara-the Encyclopedia of New Zealand, updated 1-Sep-2010: <http://www.TeAra.govt.nz/en/biographies/1h30/1>